

はしがき

本書は秋田のフィールドに関心を持つて研究を進める有志九名が集い、これまでの研究成果をまとめ上梓するものである。

私たちは秋田大学史学会近世近代史部会を拠点に研究活動を続けてきた。この研究部会は、秋田大学史学会の活性化策の一つとして、かつて史学会の草創期に学生たちが主体的におこなっていた研究会活動を復活させたものである。古代中世史部会と歴史教育部会と共に三部会で再開を企画し、二部会は展開せず、近世近代史部会だけが、一九九六年に第一回研究会を開催して以降、一八年にわたり活動を続けてきた。研究会の開催は七〇回を超えていまでも継続している。

新制国立大学が全国に設置され、戦後民主主義教育がスタートしたころ、日本史の研究は活気に満ちていた。それは地方史の時代、あるいは日本近世近代史の時代だったといつてよいだろう。戦争に対する痛切な反省は、近代天皇制国家を捉え直すという問題意識を生み、さらにはそれを生み出した日本近世社会の解明へと向かった。そこから見えてきたものは、地主小作関係の展開により資本主義の生産を支える工場労働者と、帝国主義を支えた軍隊が共に生み出されたという事実だった。その結果、地主小作制の解明が叫ばれ、それは歴史研究の中心課題に据えられた。そして、土地制度史から農民層が両極分解する問題へと進み、本来は副次的な対立に過ぎなかった地主・小作間の対立が、領主と農民間の本質的な階級矛盾をゆがめてしまった問題へと展開して一揆研究が活発に議論された。それは

正に地方が解明すべき課題で、地方でこそ地域に根ざして取り組むことができるテーマだった。

こうした流れのなかで各地の新制大学に歴史学の研究会が組織され、精力的な研究活動が繰り返された。そうした研究会の多くは、民主教育を実現する教員を養成するための大学・学部で活動の母体があった。学生たちは卒業してなお教育現場に身を置いて歴史研究に取り組んだ。秋田大学史学会はこうした流れに沿い、『秋田地方史の研究』（みしま書房、一九七三年）、『秋田地方史論集』（金沢文庫、一九八一年）、『秋田地方史の展開』（みしま書房、一九九一年）と、着実に研究成果を蓄積してきた。

しかし、いま歴史研究を取り巻く地方の研究環境は大きく変わった。教育現場の先生たちは、いじめ問題への対応など子どもたちをめぐる社会問題に追われ、地域の歴史を捉え直そうとする時間が削られている。評価主義が全体を覆い、地域の歴史を自ら掘り下げ、それを教材化しようとする試みよりは、既に解明された事象を如何に効率よく教えるか、その方法論に関心が移っているかに見える。大学の教員養成カリキュラム自体が、各教科の専門性よりも各種ボランティアや福祉施設での実習を課すなど、地域社会の中で学校教育を実践できる教員の養成を求めている。地方においては、これまで歴史研究の一翼を担ってきた一団が高齢化すると同時に、このような研究環境の変化から深刻な後継者不足に陥っている。地方の歴史研究は、いま危機的状況にある。歴史学を支える裾野の広がりという意味で、これは見過ごせない事態だと思う。

一方、この四半世紀を振り返るとき、一九八八年の公文書館法から二〇一一年の公文書管理法へと至る一連の法整備により、地方自治体レベルで文書館や公文書館が各地に設立されたことの意義は大きい。当地においても秋田県公文書館が一九九三年に設置され、二〇一六年には大仙市が東北地方で初となる市レベルの公文書館設置を決めている。また、秋田市では二〇一四年、公文書管理条例を施行し公文書館機能を市民に提供している。文書館や公文書館が各

地に設置された結果、文書論や史料管理論に関する研究が格段の進化を遂げたことは論を俟たない。今後は、それらの成果に基づいて、歴史の個別研究においても地域の歴史をより一層解明にしてくれるに違いない。地方の史学会はこれら文書館・公文書館や以前から活動実績を持つ博物館などと相互に連携し、そのつながりを強めていくことがこれまでに以上に大事になるだろう。

本書は、大学や高専・高等学校において歴史教育に携わる者と、博物館や公文書館に勤務する研究者が秋田大学史学会の研究部会を通して共に研究を深め、その成果をまとめたものである。それぞれの問題関心に基づき各自あためてきたテーマをまとめたもので、共通テーマに基づく分担研究ではない。研究会を通して心がけたのは、地域の問題に焦点を絞りつつ、それを全体史の広がりの中に位置付けて捉えようとする視点だった。一書を編むに当たり、編者は用語と表記法の統一に意を払い、事実関係に関しては執筆者と確認作業をおこなったが、それ以外の調整はおこなっていない。

地域史の研究が継続から発展へと向かい、本書がその一助になれば幸いである。

二〇一四年十一月

渡辺 英夫

目次

はしがき

第1部 近世編

秋田藩における正保国絵図の作成過程……………	渡辺英夫	3
秋田藩重臣岡本家の家計……………	新堀道生	33
組下給人の借知——十二所給人曲木氏の記録から……………	半田和彦	97
佐竹北家の分領統治——秋田藩の所預制の特質について……………	加藤民夫	121

第2部 近代編

秋田藩維新史における「砲術所藩士活躍説」の誕生	畑中康博	147
秋田県下の第三回総選挙	伊藤寛崇	181
近代土崎における福祉と資産家 —一八七〇～一九一〇年代の救貧・火災・米価騰貴を中心に—	大川啓	211
秋田の濁酒密造について—大正期を中心として—	菊池保男	251
在郷城下町増田の成立と発展 —重要伝統的建造物群保存地区の歴史的基盤—	脇野博	287

あとがき

執筆者一覧